



桜咲き誇る興国寺。写真④にある県指定文化財の仏殿(観音堂)のそばで咲くのが現在の「墨染の桜」。

**將軍への道開く  
雪辱誓った再起点**

室町幕府初代・足利尊氏は、將軍となつて間もなく、国家安泰と戦死者供養のため、弟の足利直義と全国66か国に安国寺を設置します。その中でも最初に安国寺に指定し、第一位の位置つけて領地を寄進したのが、興国寺でした。その多くが交通の要衝地にあり、幕府の軍略拠点の一面も強かった全国各地の安国寺。三方を山に囲まれ、城郭のような配置が特徴の興国寺もその面影を色濃く残しています。ではなぜ、興国寺が足利尊氏から破格の扱いを受けたのか それにまつわる尊氏の

尊氏が武運を占つたと伝わる、墨染の桜。世代交代を経て若い木が育っている。

九州へと落ち延びた足利尊氏が、この地で再起を誓う。尊氏にまつわる言い伝えは枚挙にいとまがない興国寺(上野)。そこに残されている「墨染の桜」の伝説。尊氏が再度奮起し、覇者となった出発点とも言えるエピソードに迫ります。

伝説が興国寺に残されています。その一つが「墨染の桜」です。京都占領をめぐる戦に敗走し、九州へ落ち延び、再起を図つた足利尊氏。ここで身を潜めていた尊氏は、蕾のついた桜の枝を切り、逆さに地中に挿して今後の戦運を占いました。「今宵一夜に咲けば咲けば、咲かずば咲くな。世も墨染の桜かな。」。

その「墨染の桜」は一夜にして咲きました。勝利を確信した尊氏は、勝ち戦を収めながら勢力を拡大し、京へと東上。ついに征夷大將軍となつて室町幕府を開いたという物語が今に伝えられています。

足利尊氏が京へのリベンジを誓い、雪辱を果たした再起の出発点とも言えるこのエピソードは、その後、多くの人の心に響いていきました。



尊氏が武運を占つたと伝わる、墨染の桜。世代交代を経て若い木が育っている。

身を隠した尊氏が京への再起をかけた戦運を占った

# 墨染の桜 その伝説と 物語をたどる



【あしかが たかうじ】  
**足利 尊氏**

[ 1305 - 1358 ]  
室町幕府初代將軍。征夷大將軍に任じられた後、国家安泰祈願のため、弟・直義とともに全国66か所に安国寺を設置。高僧であった無隠元晦との親交も厚かったと伝えられ、数々の尊氏伝説が興国寺に残されている。(征夷大將軍足利尊氏公像 / 栃木県足利市、足利尊氏像 / 東京大学史料編纂所蔵)

## 尊氏にまつわる伝説 馬蹄石



【ばていし】  
足利尊氏が乗った馬のひづめ跡と伝わる馬蹄石。山門へとつながる長い参道の途中にある。細く伸びた上り坂の参道は、寺の防御の役割も担った。

## 尊氏ゆかりと伝わる 千手観音座像



【せんじゆかんのんざざう】  
「尊氏の守り本尊」との説もある千手観音像は無隠元晦が京から招いたものと伝わっている。県指定文化財の仏殿に安置され、年一度ご開帳される。

## 県指定文化財 興国寺文書



【こうこくじもんじょ】  
足利尊氏や足利直義兄弟の寄進状などを収めた興国寺文書2巻。安国寺に関する最も古い文書を含んだ全国的にも貴重な資料。(県指定文化財)

## 尊氏を物語る 尊氏の隠れ穴



【たかうじのかくれあな】  
ここで再起を図つた足利尊氏が身を隠したと伝わる境内の隠れ穴。経年の土や葉の堆積もあり、以前はさらに大きく深かい穴だったといわれている。

### ここには尊氏公の高い志が宿っています



要害の地にあり、外堀や石垣、内堀など、城のような造りが特徴の興国寺。無隠元晦禅師座像(県指定文化財)



歴代藩主に庇護されてきたこの興国寺には、古くから多くの立志の人々が足を運んできました。ここに尊氏公の志と元晦禅師の徳が宿り、人々を導いているように思えてなりません。数々の寺宝や伝説が物語るメッセージを若い世代の方々に受けとめていただき、高い志を持って欲しいと願っています。



天目山 興国寺 住職 **横山 哲志**さん





